「びっしり」「ぎっしり」のアート

草間弥生のアートを解説するテレビを見ていたら、「びっしり」「ぎっしり」がキーワードとして使われていた。最初はそんなものかと画面を眺めていたが、時間が経つにつれ、なぜ「びっしり」「ぎっしり」がアートなのかという疑念にとりつかれた。

「びっしり」「ぎっしり」は、千代紙や捺染のように、あるモチーフを正確に繰り返しているのではない。円（あるいは球）や四角（あるいは立方体）のような「基本単位」があっても、その大きさ、間隔、歪みが一つ一つ異なっている。

思えば、「びっしり」「ぎっしり」は、生物の世界に満ちあふれている。いろいろな理屈が語られるが、人だって好きこのんで大都会へ集まってくる。通勤電車の「びっしり」「ぎっしり」は驚異的だ。そこでの「基本単位」は個人だが、大きさ、形態、歪みに差がある。それから、交通渋滞。自動車の種類、大きさ、色、間隔などにばらつきがある。

近年、大都会はますます膨張している。それを可能にしているのは、トラックを中心とした、小回りの利く、食料、衣料、生活用品の流通。もし、大地震で道路というパイプが詰まれば、いっぺんで飢餓に直面する。ついで、水道による飲み水や風呂、水洗トイレの給水。出てきた汚水は、下水道を経て処理場へ。その３は、電気、ガス、ガソリンのような「軽くて」、輸送の容易なエネルギー供給システム。地震で供給が止まるのも恐いが、平穏時でも人が集まりすぎて「ヒートアイランド」現象が起きている。大都会が末長く生きていくためには、必要品を供給する強力な「心臓」と丈夫な「血管」、そして「排泄系」を要する。

話が脱線したが、小さい昆虫の世界に目を移せば、「びっしり」「ぎっしり」は日常茶飯。葉っぱの裏にびっしり産みつけられた卵から孵った毛虫、その一部は糸を引いてぶら下がる。ミツバチの巣箱には、働きバチがびっしり。その下には幼虫たちの住む６角形の個室がぎっしりと並ぶ。６角形といえば、アシナガバチの巣もそうだ。６角形の意匠が、テンプレートで描いたように正確かというと、やはり「誤差」があるようだ。どこかで読んだ話だが、「名人」が同じ意匠を描くとき、見るひとが気がつかないぐらいわずかに狂わせる。そうしないと「味」がでないという。ただし、「素人」が大きく狂わせるのは、ただの下手。

トンボや蝶の複眼を拡大鏡で見れば、個眼がぎっしりと詰まる。われわれの組織、たとえば肝臓を切片にして、顕微鏡で覗くと、いろいろの形、大きさの細胞がびっしり並ぶ。動物ではなく、植物の組織、たとえば葉っぱでも同じことだ。極端なことを言えば、「多細胞生物」とは細胞が「びっしり」「ぎっしり」の存在。

それでは生物を観察し、材料にした学者達は、「びっしり」「ぎっしり」に「アート」を発見しなかったのだろうか。たぶんそれは間違いで、トンボの複眼の接写をはじめ、感動的な写真がわたしの記憶に残る。